

3才 すみれ物語

—— 自立への道のり ——

村松 三恵子

「堇^{すみれ}」ときいて、まず思い浮かべるのは道辺の紫色の可憐な花である。

私の勤める幼稚園に、数年前、この花の名のクラスが誕生した。三才児のクラスである。三才の子どもたちは、とても面白い世界に住んでいると思う。共に暮らしているとその魅力に惹かれてしまう。今回は「Aちゃん
の自立への道のり」を振りかえりながら、すみれ組の世

界の一コマを覗いてみることにしよう。

Aちゃんのこと

Aは三月生まれ。入園の頃やっと三才になったばかりの女の子である。Aの園での自立をめぐるプロセスはとても興味深い。Aに関する日々の記録を読みかえしていくうちに私の好奇心の心がうずきはじめた。以後は、

保育記録に基づいてのAの自立のプロセスである。

に添う。

● 入園式の日、彼女は母のひざの上で幼稚園を体験した。

● 四月十五日、Aの母は編物をはじめ。Aに添うこと

だけに尽くしてきた母は、この日から別の営みに取り掛かる。少し退屈そうなAに私は言葉をかける。

● 四月十日、Aの母は保育室の畳にゆったりと腰を落ちつけた。この日のAは母のひざから少し離れて歩いてみた。

「Aちゃん、ブランコにいこうか?」……少し間をおいてAがうなずく。私とAは、編物をする母と朝のタンポポを部屋に残して外へ。

● 四月十一日、家から園までの道すがらに摘んだ「たんぽぽ」を私に。Aのたんぽぽを母がいつも座している傍の小さな花びんに飾る。この日、Aは母と共に園庭に出かけていく。一輪のタンポポは、彼女の存在のあかしであるかのように、凜としてAの後姿を見送っていた。

● 四月十六日、Aの母は、保育室のメインとも言える畳

のコーナーから、出入口の付近へと住み抛を移した。Aは、時々母のひざに通いながらも、住み慣れた畳のスペースで動きはじめた。四畳程の畳の上には、程良く使いこまれた茶袱台がある。そこでは、二、三人の子どもがクレヨンを手にして何やら描いている。Aは、茶袱台の上に用意された紙の中から「小さい紙」を選んで、黒いクレヨンで描きはじめた。小さな紙の隅の隅に。この日のAの母からの自

立距離は五メートルであった。

●四月十七日、Aは私の誘いを受け入れ、園庭へ。Aはブランコに走り寄る。私はAの背を緩やかに押す。

Aはブランコに揺られながら「夏になってきた！」と呟いて、木々の向こうで眩しく輝く太陽を見上げている。この時、母から離れても充実した気持ちになれたAの喜びが、彼女の背を押す私の手の平に伝わってきた。

●四月十九日、母の会総会の日。いよいよ「ワンちゃん」のお出ましである。この日、Aの母の大きめの手提げの中から、小柄な犬の縫いぐるみが顔を覗かせていた。少し色褪せたうす桃色の体が、ほんのりとした温かさを醸^かしだして、とても愛らしい犬であった。Aの母は、登園後しばらくAと共にいたが、集会の始まりの時間が迫ると、手提げの中からその縫いぐるみを出してやりながら優しくAをさとした。

「今日ね、お母さん、お話きく日なの。Aちゃん、ワンちゃんと一緒なら待っていられる？」……Aは母の手にあったワンちゃんを抱き寄せて小さくうなずいた。

(この日から毎日、「ワンちゃん」はAと園生活を共にした。ワンちゃんは、Aのお供として、どこまでも付き添った。)

●四月二十二日、Aは二、三人の子どもと一緒に仲良くブランコ(四人乗りブランコ)に乗る。Aは椅子に深く腰掛け、片方の手でワンちゃんをしっかりと抱き、もう片方でブランコの柄をギュッと握った。

●四月二十四日、私はAと共にジャングルジムで遊んだ。「Aちゃん、そろそろおやつ時間よ。お部屋に帰りましょう」と手を差し出す私に、Aはこう答えた。「おへやまでひとりでいける！」と。

●四月二十五日、Aは、またクレヨンで描く。今度は大きい片の紙を選んで。大きい紙に前よりもずっと大きく描いた。陽気な「チューリップ」であった。その次に、Aは小さい紙に手をのばした。小さい紙の画面いっぱい色とりどりのクレヨンが踊った。Aはその絵をながめて「まぐどなるど」と言った。Aが大好きなポテトやジュースを売る店の名である。

(この頃から、お母さんがいなくても帰るまでの時間生き生きと過ごせるようになっていく。)

●五月二十一日、Aは保育室の積木コーナーに、ワンちゃんと共に出かけに行く。ワンちゃんを片腕に抱えながら、四角い積木を三個程積んで、つべんにワンちゃんを乗せた。Aは「おうち！」と言って顔をほころばせる。



●五月二十二日、この日も仲良しブランコに乗る。Yちゃんが運転手さん。ブランコ電車の出発進行ノワンちゃんを抱っこして座していたAが、突然「うんてんしゅさんになるう！」と言って立ち上がる。Aは、電車の運転手さんに。この時初めてワンちゃんが邪魔になる。そばで見えていた私に「せんせー、もって」と言っ、無造作にワンちゃんを手渡す。

(以上、保育記録より)

さて、ここで、四月から五月半ばまでのAの自立のプロセスをもう一度振り返ってみることにしよう。

タンポポの架け橋

Aは、家庭という名の、陽当たりの良い「こんもりお山」に住んでいた。こんもりお山の裾に流れる河の向こうに、少し大きな山がある。鳥たちのさえずりが聞こえてくる。木々の若葉が春の風に揺れている。Aが心待ち

にしていた幼稚園という名の山である。はじめは、こんもりお山の象徴である「お母さん」の背にのって、幼稚園という名の山に出かけていった。三日目になると、Aは家から園への道すがらに、道辺のタンポポを摘んで保育者に届けている。私はこの「タンポポ」に、母に頼りながらも、新しい世界へ前向きに歩もうとするAの心を感じとった。Aが摘んだタンポポは、Aの築いた新しい世界への架け橋ではなかったか。

存在のシルエット

前述の一ヶ月半にわたる記録のところどころに、私は「Aの存在のシルエット」をみた。例えば、四月十六日の記録に「Aは、茶袱台の上に用意された紙の中から「小さい紙」を選んで、黒いクレヨンで描きはじめた。小さな紙の隅の隅に。」とある。その日の彼女は、わずかではあるが母から離れ、自分の活動の一步を踏み出している。この事例の中の「小さな紙」の四角いスペースは、彼女にとって、「幼稚園という新しい世界」であっ

たに違いない。また、そこに描かれた隅の隅の小さな画像は「A自身」ととらえることができるだろう。これが、一番はじめの「Aの存在のシルエット」である。

第二のシルエットは、四月二十五日の「チューリップ」と「まぐどなるど」である。新しい世界を意味する「白い紙のスペース」に、大きくカラフルな表現、母からの自立が出来つつあることの喜びのシルエットと、新しい世界の地をしっかりと踏みしめたA自身の存在のシルエットが明るく重なりあっていた。

第三のシルエットは、五月二十一日の「積木のお家」である。前述の二つのスクリーンが「紙」であるのに対して、第三のスクリーンは、すみれ組の「保育室全体」である。Aの存在のシルエットは、積木のお家となつて浮かびあがっている。それまで、紙によって表現されていた「新しい世界」が、「保育室全体」に変化したことは意味深い。何故なら「保育室」は、Aにとって「新しい世界そのものの中心」であるからだ。この日私は、Aの揺るぎない確かな存在を感じたのである。

ワンちゃんの正体

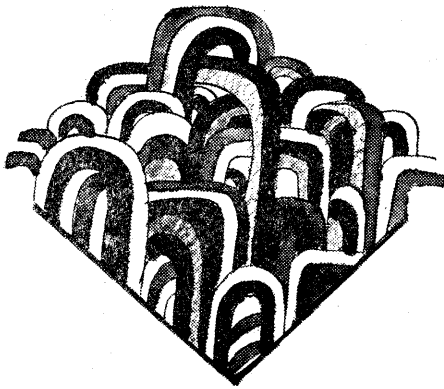
ワンちゃんの正体さて、Aにとって「ワンちゃん」とは、一体何であったのだろうか。生まれて間もない頃からAの傍には、いつもこの「ワンちゃん」がいた。言いかえれば「ワンちゃん」は「Aの歴史を共に生きた仲間」であったのだ。家庭を中心として三才になるまでの月日を共にしたワンちゃんには、家庭のぬくもりが、匂いが、味わいが、凝縮されている。言うまでもなく、「母の存在」についても同様である。しかし、重大な相違点がある。それは「母」が人間であることである。人間である以上、母は母としての意志を持つ。母としての生活もある。Aの気持ちや動きにどこまでも添い続けるという訳にはいかないのだ。編み物を始める母、集会に出かけていく母の姿が其れである。このような「母の存在」に対して、「ワンちゃん」は、限りなくAの気持ちや動きに添うことが可能なのである。さらに、Aの方からワンちゃんを裏切るようなこと（五月二十二日、ブランコ

電車の運転手さんになるAは、「妨げになるもの」としてワンちゃんを扱っている。があっても、ワンちゃんの方からは決して、Aを裏切らない。Aにとって、この「ワンちゃん」は「持ち運び自在の家庭のミニチュア」であったと言えよう。Aの母が、我が子の自立を助けるためにこの「ワンちゃん」を選んだことの素晴らしさに、今さらながら感嘆してしまふ私である。

終りに

過ぎ去った日々の小さな出来事のひとつひとつを結んでいく時、そこに新たな発見が生まれる。それは、空にちりばめられた星と星とを繋ぎあわせて、星座を描くことに似ている。しかし、保育現場の雑多な生活に身を置きながら、過ぎ去った日々^{ひそ}に潜む星座をみつけ出すことは、容易ではない。今回、私に振り返るチャンスを与えてくださった編集の小澤さんに心から感謝したい。

今、私の傍で、一才三ヶ月になる息子が静かな寝息を



たてている。左手には飲みかけの哺乳びん。右手には、真っ白で柔らかな「ニャンコ」の縫いぐるみを抱いている。この原稿を書き終えようとする今、息子に寄り添って眠る「ニャンコ」が輝いて見えた。

(横浜学園付属元町幼稚園)



定価改訂のおしらせ

本誌の定価を左記の通り改訂させていただきます。なにとぞご諒承の上、ひきつづいてのご愛読をお願いいたします。

記

「幼児の教育」

定価四〇〇円

(昭和六十一年四月号より)

株式会社フレーベル館

読者各位